

はじめに

本書は2017年10月に日本女子大学で開催された公開シンポジウムの発表をもとにまとめた論文によって成り立っている。このシンポジウムは日本女子大学文学部学術交流企画、日本女子大学大学院文学研究科主催、機能語用例文データベース『はごろも』研究会共催で行った。同シンポジウムは2010年から2018年まで毎年1回テーマを変えて開催され、多くの研究者、大学院生、現場の日本語教師の来場者があった。2015年までの成果は『習ったはずなのに使えない文法』(くろしお出版、2017年)にまとめた。

2016年に行ったシンポジウムでは、現場の先生方に、授業において困っていることをアンケート形式であげていただいた。その中に自動詞・他動詞に問題があるとの回答が多かったため、2017年は自動詞・他動詞をとりあげることにした。

自動詞・他動詞に関しては長い研究の歴史があり、多くの知見が発表されている。本書は第二言語習得、日本語学、対照研究、コーパス研究などの各分野の研究者がそれぞれの視点から考察・報告したものと、授業実践に関するものから成っている。

以下に各論文の内容を簡単に紹介する。

中石ゆうこ「日本語の対のある自動詞、他動詞の習得段階とそれに適した指導方法」は、自動詞・他動詞の問題を全体的に整理している論文である。これまで日本語教育現場において日本語教師や研究者によって指摘された自動詞・他動詞についての困難点を整理し、それを、日本語学、第二言語習得研究の研究成果を用いて解説している。その上で、学習者を対象に、既知語調査を行い、その結果を示している。そして、それらの研究をふまえ、自動詞・他動詞の習得段階は他動詞が容易で自動詞が困難であるという見方をするのではなく、自動詞・他動詞の動詞を語

別に捉える必要性を述べている。

中俣尚己「日本語母語話者は本当に自動詞を好むのか？」は、我々がよく接する「日本語は「なる言語」であり、自動詞を好む。」という言説について、それは正しいかコーパスを用いて使用実態を調査した論文である。レジスター別に見ると、自動詞の割合が高いものと低いものがあり、専門性が高く硬い文体ほど自動詞が使われる割合が低く、日常会話では自動詞の割合が高いという結果を報告しており、日常会話においては日本語が自動詞を好む言語であるという表現は当たっていると述べている。そしてこの結果は、責任をどう表現するかと関わっているとしている。また、初級教科書で紹介される自動詞・他動詞について、そのコロケーションを調べ、書き言葉と話し言葉ではコロケーションが異なっていることを示している。

李在鎬「学習者作文と自他の使用頻度」は、以下の3点の研究課題について、学習者コーパスを用いて調査を行った。

- 1) 母語によって自他の使用頻度に差はあるのか。
- 2) 習熟度によって自他の使用頻度に差はあるのか。
- 3) 作文の課題によって自他の使用頻度に差はあるのか。

その結果、自動詞・他動詞の使用頻度は母語による差はないこと、習熟度および作文の課題を考察した場合は、自動詞・他動詞の使用頻度には差が見られることが明らかになった。そして、自動詞・他動詞の使用頻度は話題によって異なる可能性があるとして述べている。

山崎誠「辞書における自動詞・他動詞とコーパスにおける実態」は、動詞の自他の区別の扱いがどのようになっているかを複数の国語辞書で調べ、その違いの原因を分析した論文である。辞書によって自他の表記に違いがあるかどうかを調査し、違いがあった場合はコーパスにおける頻度情報と比較した。

動詞は日本語学習辞書支援グループ(2015)「日本語教育語彙表 Ver 1.0」のうち、難易度が初級前半、初級後半とされている122語を対象とし、5冊の国語辞書を対象に調査した。その結果、新用法と既存の用法のとりえ方により、調査語の約16%に自他の記述の違いが見られ

た。しかし、コーパスでの使用状況の調査によると、自他が不一致とされる動詞は実際には自動詞か他動詞に大きく偏って使われていた。辞書は特殊な用法も取り上げているため、学習者は辞書とコーパスを併用し、実態を理解する必要があると結論付けている。

建石始「コロケーションに注目した日中同形動詞の対照研究——「拡大する」・「広げる」と「扩大」／「増加する」・「増える」と「増加」を例に——」は、中国語母語話者が日本語の自動詞・他動詞を用いる場合に遭遇する漢語動詞での自動詞・他動詞のコロケーションの問題、和語動詞と漢語動詞の違いの問題を、「拡大する」・「広げる」と「扩大」、「増加する」・「増える」と「増加」を例に考察した日中対照研究の論文である。その結果、同じ自他両用動詞であっても、自動詞用法、他動詞用法、自動詞用法の使役形のうち、どの使用頻度が高いかは動詞によって異なることを指摘した。また、それぞれのコロケーションについては、日本語の「拡大する」と中国語の「扩大」の主語になる名詞は似た傾向を示すのに対し、目的語になる名詞は日中両言語でそれほど重ならないことを明らかにしている。一方、中国語の「増加」の主語になる名詞は日本語では和語動詞の「増える」に近い関係となる可能性があることを指摘した。このように日本語・中国語のコーパスを用いることによってコロケーションを明らかにし、両言語の間の正の転移、負の転移を予測することが可能となると述べている。

堀恵子「中国語を第一言語とする学習者に対する二字漢語自動詞・他動詞の実践授業——経済学部・学部1年生対象の授業において——」は、中国語を母語とする大学生に対し、二字漢語動詞の自動詞・他動詞に関する授業を行い、語レベルでの習得に焦点を当てて、自動詞か他動詞かの判断に効果が見られたかを検証するものである。以下の研究課題を設けた。

1) 二字漢語の自動詞と他動詞の判断は、どちらが難しいか。

これは助詞「を」が付くかどうかを正しく選択できるかどうかによって評価する。

2) 指導によって、二字漢語の自動詞と他動詞の判断は向上するか。

これは、学習のはじめに行った自動詞・他動詞に関するチェックテストと学期末テストでの得点を比較して検証した。

自動詞であるか他動詞であるかの判断に関して、自動詞のほうが有意に正答率が低かったことから、自動詞であると判断することのほうが難しいと結論づけている。

指導によって自動詞か他動詞かの判断が向上するかという問いに対しては、授業によって全体的に正答率が上昇することが明らかになったが、語ごとに見ると有意な差が見られなかった語もあったと述べている。

江田すみれ「無対他動詞の受身と自動詞——いくつかの動詞の語義と受身の関係——」は、無対他動詞と受身の関係を取り上げている。対のある自動詞・他動詞では、話者が「働きかけ」に注目した場合は他動詞、「変化」あるいは「受け手」に注目した場合は自動詞を用いる。そして対のない他動詞を自動詞的に用いる場合は受身を、対のない自動詞を他動詞的に用いる場合は使役を使うと言われる。しかし、無対他動詞は、どの動詞でもどのように使った場合でも、受身にすれば自動詞として使えるわけではない。本論は無対他動詞を受身にして自動詞的に用いる時、以下の3点について調査を行った。

- 1) 多義的な動詞のどのような語義が受身で用いられるか。
- 2) 受身で使われた場合、どのような意味になるか。
- 3) 36 身になった場合、辞書に書かれた語義から離れた使い方をする語はどの程度あるか。

16 語の使用頻度の高い無対他動詞を調査した結果、約半数の語について、受身として使う語義が偏っている、能動文とは多少異なる意味で用いられるものが見られた。

江田すみれ・相澤早帆・白鳥藍「中級学習者に対する自他動詞の授業とその効果——授業、事前・事後テスト、遅延テストを通じて——」は、日本語学校で学ぶ中級学習者に対し、自動詞・他動詞の授業を行い、授業に効果があったかどうかを調査したものである。

中石(2017)は自動詞・他動詞の教育には、①自動詞・他動詞を両方

知っていること、②自動詞・他動詞の区別が合っていること、③他の形式と混同していないこと、の3点の認識が必要と述べた。本論は①②を示して授業を行い、その結果を事前テスト・事後テストだけでなく、8か月後に行った遅延テストの結果も比較して検討したものである。その結果、以下のことがわかった。

- 事後テストでは点数が有意に上がった。遅延テストでは、事前テストとの間に有意な差はなかったが、点数は上がった。
- 自動詞・他動詞についての質問紙調査を行ったところ、自他動詞に関する文法事項10項目中7項目について、半数以上の学習者が知らないと答えた。
- 事後テスト、遅延テストの両者において、自動詞全体の点数と他動詞全体の点数に差はなかった。全体として自動詞の使用が難しいという結果にはならず、語ごとの問題に注目することが提示された。

以上、自動詞・他動詞に関する多様なアプローチの論文、授業の実践報告をまとめた。今回の研究が読者の皆様にとって新たな発見となり、授業実践を行う際の何らかのヒントとなれば幸いである。

本書の論文の著者の多くは機能語用例文データベース『はごろも』構築にあたった研究者である。『はごろも』は、文法項目を入力すると、意味、話し言葉・書き言葉の用例、学習者の用例、前接形態、品詞、難易度などが調べられるツールで、web上の検索エンジンと、Excel表形式のダウンロードの2つの方法で利用できる。2010年から科学研究費の助成を受けて開発を始め、2015年から公開している <<https://www.hagoromo-text.work/>>。日本語教育に関わる方々の支援と、中上級以上の学習者の支援を目指したものである。

本書、前作『習ったはずなのに使えない文法』と併せて利用していたき、文法教育に役立てていただければ幸甚である。

2020年6月

江田すみれ・堀恵子

目 次

日本語の対のある自動詞，他動詞の習得段階とそれに適した指導方法 中石ゆうこ	1
日本語母語話者は本当に自動詞を好むのか？ 中俣尚己	25
学習者作文と自他の使用頻度 李 在鎬	43
辞書における自動詞・他動詞とコーパスにおける実態 山崎 誠	57
コロケーションに注目した日中同形動詞の対照研究 —「拡大する」・「広げる」と「拡大」／ 「増加する」・「増える」と「増加」を例に— 建石 始	73

中国語を第一言語とする学習者に対する 二字漢語自動詞・他動詞の実践授業 ——経済学部の学部1年生対象の授業において—— 堀 恵子.....	89
--	----

無対他動詞の受身と自動詞 ——いくつかの動詞の語義と受身の関係—— 江田すみれ.....	115
--	-----

中級学習者に対する自他動詞の授業とその効果 ——授業，事前・事後テスト，遅延テストを通じて—— 江田すみれ・相澤早帆・白鳥 藍.....	149
--	-----

執筆者紹介	193
-------	-----

日本語の対のある自動詞，他動詞の習得段階とそれに適した指導方法

中石ゆうこ

1. はじめに

「ドアが開きます。」と「ドアを開けます。」，「電気がつきます。」と「電気をつけます。」の違いをどのように指導するか。日本語教師として自動詞，他動詞の指導の仕方に悩んだ経験がある読者も多いだろう。「開く-開ける」，「つく-つける」のような対のある自動詞，他動詞は初級レベルで提示される学習項目であるが，学習者，教師とも苦手意識を持つ場合が多い。

そこで本研究は，対のある自動詞，他動詞の指導上の困難点を明らかにした上で，日本語学，第二言語習得研究の知見と結びつけながら日本語の対のある自動詞，他動詞の習得段階を説明する。さらに，それに適した日本語教育現場での指導方法を提案する。

そのために2節では日本語教育現場での自動詞，他動詞指導をめぐる，日本語教師や研究者によって指摘されてきた困難点をまとめる。3節では日本語学，第二言語習得研究の研究成果と対のある自動詞，他動詞の指導の困難点とを関連づけることで問題を解きほぐす。4節では学習者対象の既知語調査の結果を示し，5節では自動詞，他動詞の習得段階を語別に捉える必要性を述べる。本研究はこの一連の議論を通じて教育現場での対のある自動詞，他動詞の捉え方を振り返るきっかけを提供したい。

日本語母語話者は本当に自動詞を好むのか？

中俣尚己

1. はじめに

自他の習得に関して、特に学習者は日本語の自動詞表現の習得に困難を抱えるとされることが多い。学習者からも「自動詞はいつ使うのか」といった質問を受けることもあるし、習得研究でもやはり自動詞のほうが難しいという結果が出ることが多い(小林 1996)。このことは、裏を返せば、学習者の母語では他動詞を用いて表現する際に、日本語では自動詞を用いて表現することが多いということである。このことを端的に表現すると、「日本語は「なる言語」であり、自動詞を好む。」という言説になる。

しかし、この「好む」ということはこれまで量的に証明されたわけではない。本研究の目的は、以下の通りである。

- 日本語話者が、本当に自動詞を好んでいるかどうかを作例ではなく使用実態に基づいて検証する。
- 初級教科書で導入に用いられる自動詞・他動詞をコロケーションの観点から検討する。

以下、2 節では自他動詞のどちらを好んでいるかということに関する先行研究を紹介する。3 節では本研究の方法について説明し、4 節では調査結果を示す。5 節では文体という観点から調査結果を考察し、6 節では会話での使用について分析する。7 節では初級で扱われる個別の自

学習者作文と自他の使用頻度

李 在鎬

1. はじめに

自他の問題は、日本語の構文現象を理解するための基本的な性質である。したがって、日本語学習者にとっても重要な学習項目であることに違いない。そして、多くの日本語学習者において(母語や日本語の習熟度に関係なく)、誤用が見られており、日本語の文法習得における普遍的な課題になると考えられる。こうした課題を受け、本研究では、日本語学習者の作文を例に、母語や習熟度や作文の課題が自他の問題とどう関連しているかを調査した。

2. 先行研究と本研究の課題

自他の問題をめぐる考察には、対の有無から動詞の分布を捉える研究(寺村 1982, 早津 1995, 中石 2005), ヴォイスの観点から日本語動詞の形態・統語的特徴を明らかにする研究(野田 1991), 文文法の意味論を捉える研究(佐藤 2005), 「なる型言語」と「する型言語」の類型論的な立場から捉える研究(池上 1981, 西光 2010)など、様々なアプローチが存在する。しかし、日本語学や理論言語学の枠組みでなされた研究の多くは分析者の内省に基づくものであった。

内省に基づく研究の意義を否定するものではないが、分析結果の信頼性という意味では、個人の言語感覚に大きく依拠するものであり、精緻

辞書における自動詞・他動詞と コーパスにおける実態

山崎 誠

1. はじめに

自動詞・他動詞の区別は多くの国語辞書に掲載されているが、それらの情報はどの辞書でも同じなのだろうか。もし、同じだとしたら辞書は1冊持っていればよいことになる。自動詞・他動詞の区別が違っていたら、複数の辞書を見比べて判断することになるだろうが、どれが妥当なのかは、日本語学習者はもとより、それを教える教員でも判断は難しいのではないだろうか。

そこで、いくつかの国語辞書を比較して、動詞ごとに自動詞・他動詞の情報がどのようになっているかを調べ、その違いの理由を分析することにした。また、自他にゆれがあった動詞をコーパス(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』)における頻度情報と比較し、辞書における自他のゆれがコーパス上ではどのように現れるかも併せて概観した。コーパスの利用は日本語教育でも近年普及しつつある。コーパスから得た情報を教育の現場に活かすためには、教師側がコーパス使用のメリットをまずしっかりと理解した上で、授業内容に反映させることが肝要である。本稿では、ウェブ上で簡単に利用できる「中納言」という検索システムを使った結果を用いて、実際の用法を観察した。また、学習者もコーパスを利用することで、一層理解が深まるものと思われる。

なお、国立国語研究所(西尾・宮島)(1971)に「自動詞か他動詞か決め

コロケーションに注目した日中同形動詞の対照研究

—「拡大する」・「広げる」と「扩大」／
「増加する」・「増える」と「增加」を例に—

建石 始

1. はじめに

中国語を母語とする日本語学習者に作文指導を行っていると、次のような誤用に直面することがある。

(1) 日本語のレベルを上げるために、見聞を拡大する必要がある。

(2) 我々は外国人と交流するチャンスを増加しなければならない。

(1)は「拡大する」ではなく「広げる」を使ったほうがいいし、(2)は「増加する」ではなく「増やす」を使うべきであろう。このように、漢語動詞と和語動詞の使い分けは上級の学習者にとっても難しい課題である。

また、「拡大する」や「増加する」は自動詞、他動詞のどちらでも使うことができる¹し、他動詞の場合、「させる」との違いも問題となる。

(3) a. 行動範囲が拡大した。

b. 犯人は行動範囲を拡大した。

c. 犯人は行動範囲を拡大させた。

(4) a. 定員が増加した。

b. 大学が定員を増加した。

c. 大学が定員を増加させた。

¹ 以下では、自他両用動詞と呼ぶことにする。

中国語を第一言語とする学習者に対する 二字漢語自動詞・他動詞の実践授業

— 経済学部 1 年生対象の授業において —

堀 恵子

1. はじめに

中国語を第一言語とする日本語学習者(以下,「中国語話者」)にとって,日本語の漢語の習得が必ずしも容易ではないことがこれまでの研究で指摘されている。語の意味に関して,同形同義語(S)¹の場合は中国語からの正の転移によって習得が容易であるが,意味の一部が重なっているがずれがあるもの(O),同形異義語(D),中国語には存在しないもの(N)の場合には,中国語からの負の転移によって困難があることなどが指摘されている(陳 2003a, 加藤 2005)。

しかし,語の習得は意味の側面だけではない。Nation(1990, 2001)は語彙知識について,語形 form, 意味 meaning, 使用 use の3つの要素から構成されると定義しており,文法上の機能や連語に関する知識なども必要であると指摘している。二字漢語動詞の場合,意味が同じであっても品詞が異なる場合があり(陳 2003b),それによって習得に影響があることが指摘されている(熊ほか 2017)。さらに,本研究で扱う自動詞・他動詞については,同じ動詞であっても自動詞か他動詞かのずれが語の習得とそれに関連する受動文・使役文の習得の困難につながっていることが指摘されている(馮 1993, 1994, 庵 2008, 2010)。

¹ 文化庁(1978)の記号による。以下,同じ。

無対他動詞の受身と自動詞

— いくつかの動詞の語義と受身の関係 —

江田すみれ

1. はじめに

日本語の自他動詞については数多くの研究が重ねられてきている。中石(2002)は、対のある自他動詞では、話者が「働きかけ」に着目した場合は他動詞、「変化」あるいは「受け手」に注目した場合は自動詞を用いる、として、以下の例をあげている。

(1)a. 「働きかけ」に注目する→他動詞

ちょっと落としたくらいで、データは消えない。

c. 「変化」に注目する→自動詞

もう、受付終わりましたよ。

(中石 2002 : 386 枠線も中石 abc の ac のみ引用)

庵(2012)は「受動化は他動詞を自動詞的にする操作」ともいえ、「自動詞文と他動詞の受動文は密接な関係がある」と述べている。

(2)a. ドアが開いていた。(自動詞)

b. ドアが開けられていた。(他動詞の受動文)

(庵 2012 : 136-137)

そして、他動詞しかない動詞で変化あるいは結果を述べる場合には、以下のように受身を用いて表現することになる。

(3) 委員会が行われた。(作例)

しかし、他動詞はどの動詞でも受身にするだけで自動詞的に使えるわ

中級学習者に対する自他動詞の授業とその効果

— 授業, 事前・事後テスト, 遅延テストを通じて —

江田すみれ・相澤早帆・白鳥 藍

1. はじめに

自動詞・他動詞は現場の教師もどのように指導すればいいか、頭を悩ませている問題の一つであろう。上級学習者になっても自動詞・他動詞の使用に誤用が見られる学習者もいる。

本研究は、中級学習者に対して自他動詞について教室で指導し、その結果、自他動詞が使い分けられるようになったかどうかを、事前テスト、実践授業、事後テスト、質問紙調査、遅延テストを通して分析したものである。事前テストから質問紙調査までを2018年度に行い、遅延テストを2019年度に行った。

中石(2017)は自他動詞の教育には、①自他動詞を両方知っていること、②自他の区別が合っていること、③他の形式と混同していないこと、の3点の認識が必要と述べた。

本研究は中石(2017)の①と②を学習者に伝えて教育した場合、効果があるかを調査、分析したものである¹。

1.1 本研究の特徴

本研究の特徴について要点をまとめると下記のようなになる。

¹ ③は他動詞と受身が混同されるなどの問題を指すが、今回の実践では自他動詞を見分けることを目的としたので、受身・可能などの活用形は扱わなかった。